

祝祭の街を遠く離れて —堤 清二と失われた西武王国—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

父が一代で築き上げた西武王国の傍流で堤清二（1927-2013）はビジネスの道を歩きはじめた。経営不振の西武百貨店に入社し、主力の鉄道部門は父の遺志でグループ総帥に指名された異母弟の義明に委ねられた。

仕事の傍ら堤は辻井喬のペンネームで小説家・詩人としての活動に情熱を燃やしていく。芸術的な感性は消費と文化の融合という独自の経営戦略を生み出し、生活総合産業として最盛期に売上高4兆円を超えるセゾングループを牽引した。流行の発信基地として東京・渋谷が若者の街に生まれ変わったのは堤の関与なしに考えられない。

だが一世を風靡した輝かしい時代もバブル経済の終焉に連れて光を失った。経営は破綻し、父と子が愛憎の果てに守り抜こうとした王国そのものが瓦解する。それでもすべてが幻だったわけではない。堤が夢想したものはたしかに存在した。

彷徨の季節のあとで

西武グループ創始者で政治家としても君臨した父の堤康次郎は5人の女性と5男2女をもうけた。堤は愛人でのちに入籍する青山操を母として生まれた。子供の頃は2間しかない東京・三鷹の家に母と妹の邦子と3人で住み、たまに康次郎が訪れてきたという。

府立十中から旧制成城高校を経て東京大学経済学部に進学する。同級生としてのちに読売新聞社を率いる渡邊恒雄と日本テレビの社長となる氏家

齊一郎せいいちろうがいた。彼らのすすめで日本共産党に入社する。保守的で家父長的な暴君の父に対する反発もあって左翼活動に没頭したものの、党内の分派闘争で除名された。

1951年に卒業し、肺結核の療養後、衆議院議長を務めていた康次郎の秘書となる。この頃から詩を書き始め、1954年26歳で池袋の西武百貨店に入社。翌年から取締役店長となり、辻井喬の筆名で処女詩集『不確かな朝』を上梓した。

1956年、西武百貨店のスーパーマーケット部門として西武ストアを開設し、1963年に西友ストアに衣替える。西友は西武鉄道沿線を中心に店舗を拡大し、のちに西友の小型店としてファミリーマートが誕生した。

1964年、康次郎が他界し、鉄道・ホテル・レジャー施設を本流とする西武グループの総帥の座は堤義明に引き継がれた。1966年39歳で西武百貨店の社長に就任した堤は老舗の三越や伊勢丹より格下と見られていた同店にエルメス、アルマーニ、イヴ・サンローランなどの高級ブランドを品揃え



堤 清二

し、過去のイメージを刷新していく。

創作活動では1969年、父との葛藤をテーマにした自伝的処女小説『彷徨の季節の中で』を発表し、作家としてデビューした。

消費者文化の多様性を

1969年はファッションを中心とするテナント式のショッピングセンター・パルコの誕生の年でもあった。池袋西武に隣接する百貨店・東京丸物を買収し、第1号店を開設する。堤義明とは相互干渉の確約を交わし、1971年にセゾングループの前身である西武流通グループを旗揚げした。

1973年、パルコは東急百貨店を中核とする渋谷に進出する。強盗慶太の異名をもつ東急グループの創始者・五島慶太はピストル堤と呼ばれた父の康次郎とかつて覇権を争った因縁の間柄だった。

当時の渋谷は道玄坂と東急本店へ向かう西南部が賑わい、渋谷区役所方面の通称・区役所通りは閑散としていた。イタリア語で公園や広場を意味するパルコの登場で区役所通りはヨーロッパ調の公園通りへ一変する。イッセイミヤケやコム・デ・ギャルソンなどパルコが発信するデザイナー主体の個性的なDCブランドを身につけて渋谷を闊歩することが若者たちの憧れになった。パルコ劇場では前衛的な演劇を上演してカルチャーショックを与えた。

池袋ではセゾン美術館、アート系書店で美術品も扱うアール・ヴィヴァン、大型書店のリプロが話題を呼んだ。セゾンの語源はフランス語の季節でアメリカ一辺倒ではない消費者文化の多様性を追求していたとっていいだろう。

1980年から西友のプライベートブランドとして展開した無印良品は既存のブランドと対抗することを明確に意識し、あえて英語のノー・ブランド・グッズを直訳して無印良品と名づけられた。コピーライターの糸井重里による1980年代前期の「じぶん、新発見。」「不思議、大好き。」「おいしい生活。」などは消費者の自立を促すキャッチコピーとして社会的反響を巻き起こす。

ふだんは穏やかな物腰の堤も文化戦略をめぐる会議では父親まがいのワンマンに豹変した。堤の意図を理解しない社員を「店をつくるんじゃない、

街をつくれ」「パルコが売るのは空間だ。商品ではない」と容赦なく叱り飛ばした。

父に愛されていたのは

1985年、約100社に拡大した西武流通グループをセゾングループに名称変更する。1987年、西武百貨店の売上高が業界トップとなり、新たに銀座セゾン劇場とホテル西洋銀座を開業した。同年、国際的な高級ホテルチェーンであるインターコンチネンタルホテルを買収して西友の子会社にする。

しかしバブル時代の不動産投資が不良債権化し、1991年にセゾングループ代表を辞任。その後も負債は解消せず2000年に保有株の処分益など100億円を出資し、セゾングループは事実上解体する。

一線を退いてからは本格的に文筆活動を再開した。2001年の評論『伝統の創造力』では「小売・流通・ファッションといったビジネスの中にいた私は自分が推進してきたのはこうした猥雑な都市を造ることだったのだろうかという不安に捉われないわけにはいかなかった」と祝祭の街・渋谷の変貌に自戒を込めて言及した。2004年には父へのレクイエムというべき『父の肖像』を刊行する。晩年は護憲派として積極的に発言し、原発推進や特定秘密保護法の制定に反対した。「どのようなシステムであれ、批判者や対抗者が存在しなかった途端に墮落は始まります」が持論だった。

2005年に堤義明が証券取引法違反で逮捕されると彼を烈しく非難する一方で銀行から来た経営陣や大株主の海外ファンと対立した。創業者の一族として西武鉄道グループの再建をみずから果たそうとしたのだ。

大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した『堤清二 罪と業 最後の告白』によると、作者の兄玉博は堤が86歳で亡くなる前年にロングインタビューを行い、その動機を尋ねている。すると堤は「父が命がけで守ろうとしたものを、子供として守ってやりたいと思うもなんです」「父は命をかけたんですよ。それを息子は守ってやりたいと思うんですよ」と訴えるように答えた。

そして「父に愛されていたのは私なんです」と断言する。堤はまさしく告白していたのだ。父に愛されるために自分は必死で生きてきたのだと。